

○冒頭で書いたように般若札を小さくしました。「火の要慎」のお札も小さくしました。しかも今年とは異なる字体になりました。塩原温泉の妙雲寺に伝わる富岡鉄斎筆「火要鎮」の写しです。富岡鉄斎（一八三七年〜一九二四年）は江戸時代末期に京都に生まれた文人画家。「火要鎮」の「鎮」は鎮守さまの「鎮」で、「しずめる」の意味です。「火は心を鎮めて使え」というのでしよう。お札が小さくなったので、お届けする封筒も小さくしました。今どきは各家庭のポストも小さくなくなったので、これまでの大きい封筒では不便だったでしょうか。知らぬまに迷惑をかけたいたらごめんさい。裏面のカラーに書きましたが、本堂内部の壁の補修をするため、六月三日（月曜日）から九日（日曜日）まで本堂がつかえませんが、年忌法要などは他の日に予定していただきます。壁は補修をして塗りかえて、畳も入れ替えます。今の本堂が完成したのは昭和三十四年ですから五十三年が経ちます。畳はシン（床）から交換します。ほんとうは、今の畳床を補修して使いたいのですが、例によってその方が費用がかさむようです。以前、京都にある文化財を

編集後記

修理したとき、明治時代からの畳床を補修して現在も使っている、という報道をよみました。松岩寺の本堂は文化財なんかではないけれど、あと数十年したら何に指定されるかわからないですよ。その時のために畳床も建設当時のものを残したいのですが……。文化財なんかにはならないか！○文化財といえば昨年九月に九州の博多にある聖福寺の仏殿の解体修理が終わって、落慶式に参列しました。聖福寺のキャッチフレーズは、「日本最初の禅寺」です。中国から初めて臨濟禅をもたらした栄西禅師が創建した寺だからです。そんなお寺の仏殿ですが、指定文化財ではない。正確にいうと、これから文化財になるところだったようですが、解体修理して狭かったのを広くして、巨大な木造建築にエアコンを完備してしまっただけで、残暑厳しい福岡の落慶式も涼しい行事だったけれど文化財指定はおあずけになった。文化財の名誉などには目もくれず、未来に生きる建物を選択した聖福寺のご住職は、私の修行道場の恩人です。近いうちに、「九州の禅寺を訪ねる旅」を企画して、聖福寺をお参りしたいですね。という、近いうちとは何時になるのだ。（住職記）

新しい年に皆さんへお配りする、般若札（はんやふだ）のサイズを小さくしました。これには、次のような意図があります。

たとえば、新しい般若札をどこに置きますか。仏壇の中に封筒ごと置いておく。なんていう方が多いでしょうか。そうではなくて、お札は封筒から出して、お札だけを玄関などの出入りする場所に張ってお祀りしていただきたいのです。お札が家中を見渡して、お札の下を行き来する者の災いを除くといえます。

大般若寶牘 松岩寺

玄関には場所がなければ、どこでもよいから、見えるところにおいてもらいたいのです。そのためには、住宅環境が狭小な現在、以前の般若札では大きすぎるから小さくしたわけです。

そもそも、あのお札は何なのか。大般若波羅蜜多經六百卷のエッセンスである理趣分と般若心經をおとなえて、新しい年の平和と安全を祈願したお札です。ならば、お札一枚で、幸せ

なれるかという点、そんなことはない。紙のお札に霊験などないかもしれないけれど、玄関でお札を目にしたら般若経の空（くう）の心を思い起こす効果があります。空の心って何か。かたよらない、こだわらない、とらわれない。こんな心でいられたら、すべてが上手くいくのですが、そうならないから難しい。

ところで、昨年の夏、京都の愛宕山に登りました。愛宕山には火伏せの愛宕神社があります。山頂の社務所には「火要要慎」のお札の隣でシキビの枝を売っていました。竈（クド）を使っていた昔、毎朝最初に火をおこすとき、シキビの葉を一枚いれると火事にならないという慣わしからだといえます。緑色の葉一枚に防火の効能があったわけではない。葉を一枚手に取ること、その日の安全を点検したわけです。同じように、毎日の心の有り様を確認するために、般若札はよく見るところに張ってほしいのです。

不連続シリーズ「いっぷく紹介」あらため「見つけた」

少し前から、「いっぷく紹介」と題して、松岩寺にある墨跡（ぼくせき）を紹介してきましたが、これってあまり趣味がよくないですね。見せびらかして自慢たらしめて。それで新しい年から「いっぷく紹介」改め、「見つけた」。

見つけた！

寺にある墨跡ばかりではなく、街にある看板から禅を見つけ、現代に仏教を見つける。なんていうことができたらいのですが、難しいかなあ。



博士は明治三年に金沢に生まれ、昭和四十一年に九五歳の生涯を閉じるまで、膨大な禅の書籍を発表します。今、容易に入手できるのは岩波文庫『禅と日本文化』です。この文庫本は鈴木大拙著とありますが、北川桃雄翻訳と添えられています。つまり、博士が英語で講演したり書いたりしたものを美術史家の北川氏が日本語に翻訳したわけ。はじめから英語圏の人たちをターゲットに禅を語ったのだから強いのです。

今回見つけたのは、「ZEN」の文字。写真の「串ぜん」というのは、昨年の秋、有志の方と本山妙心寺をお参りした夕方、宿舎の近くで見つけた串焼き屋さんの提灯です。『プレゼンテーション禅』というのはビジネス書のタイトルです。ずいぶん前から、どのくらい前からかは後で書くけれど、「禅」の字を拝借した店名とかタイトルを時どき目にします。

松岩寺の宗派は禅宗で、わたしは禅坊主で、日曜日の朝には坐禅会をしているから、禅をひろめてくれるのは有難いけれどなにゆえに、禅の文字がもてはやされるのか。東京のホテルニューオータニにも「エグゼクティブハウス禅」というのがあつたらしい。キャッチコピー曰く、「茶の湯に代表される日本のおもてなし文化にも受け継がれている禅の精神こそ、日本から世界に発するラグジュアリーホテルに相応しいおもてなし」

要するに、禅ナントカと言っておけば、日本的で俺びさびの香りがするだろう、という次第。そして、なによりも外国人にうけがよいのだなあ。

たとえば、東京・広尾で禅寺の住職をしている知人がいる。その寺では毎朝七時から八時まで坐禅会をしている。週一回とか月一度ではないですよ。毎日ですよ。しかも、いつも二十人ほどが坐りに来るという。そして、半分は外国人だという。広尾とい

う土地柄、周辺に大使館が多い。その関係者がせっかくな日本に駐在しているのだから、坐禅を経験していいことと、やってくるのだらうです。どうして外国で有名なのか。これは、多くの先人のおかげですが、代表的な人物をあげれば、鈴木大拙博士の功績です。

博士は明治三年に金沢に生まれ、昭和四十一年に九五歳の生涯を閉じるまで、膨大な禅の書籍を発表します。今、容易に入手できるのは岩波文庫『禅と日本文化』です。この文庫本は鈴木大拙著とありますが、北川桃雄翻訳と添えられています。つまり、博士が英語で講演したり書いたりしたものを美術史家の北川氏が日本語に翻訳したわけ。はじめから英語圏の人たちをターゲットに禅を語ったのだから強いのです。

今だに禅の入門書として評価の高い『禅と日本文化』の初版は一九四〇年（昭和十五年）。この年を境に、「禅」が「ZEN」になっていく。

そんな背景があつて、京都・鉾町の居酒屋の提灯や、ビジネス書のタイトルに「ZEN」を見つけた！